

大学放浪記 (26)

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報でも引き続き大学の「国際交流に於ける管理運営のまずさ」、さらには最低限の国際感覚、さらに低い次元での表現となればエチケット、マナーのレベル迄レベルを下げて話をしなければ成らない。いささか悲しい限りであるが致し方無い。敢えて書いておきたい。これまでも既述したが、タイの大学は日本と異なり、教員の職階に数の制限はない。教員本人に能力があれば昇格、昇級、昇任は可能である。さらに自薦、他薦も可能である。自ら必要資料を揃えて申請をすれば、審査評価委員会が組織され、然るべきプロセスを経たのち、条件を満たせば昇格が認定される。米国の大学のシステムと類似している。職階の総数に制限があると優秀な人材であってもポストがなければ上がれない。昔の日本の小講座制で教授、助教授、助手の3ポストがひとつの研究室に在籍する形式では、上位のポストが開かない限り昇格はできない。しかしタイではその様な制限はないから、本人に能力があり業績を含めた諸条件を満たせば昇格できる。だが管理職である主任、学部長、浮く学長、学長に至る迄、そのステータスは必ずしも教授でなくても良い。管理能力に秀でていれば教授でなくても良いと言う認識が一般化しており、そうした背景もあってか学長レベルでも教授の職階に属する人物は極めて少ない。また一度管理運営に携わると研究に割く時間は極端に少なくなり、研究を主とする教員職に戻るのは難しくなる。長らく論文を書くことから遠ざかっていると、その書き方さえも忘れ、論文を書くのがおっくうになる。すると益々論文を書くことから遠ざかり積極的に論文を書くと言う姿勢から遠ざかる。論文を書かないと業績が上がらないから昇格、昇級は益々難しくなる。その様な状況のもとで管理運営においても自ら学習する姿勢がなければ、評価が下がる。業績はないし、管理運営においても満足な評価を得ることが出来なくなれば、将来的にどうすれば良いかと言う問題を避けることはできなくなる。悲しい末路を迎えなければならぬし、その後の将来は自分より職階の上の副学長や学長のコントロール下での行動に制限される事になる。そうでなくても昔の教育研究職の教員に戻りたいという学術肌の教員もいるが、それでも職階は最低限教授であるべきである。若くして主任や学科長になった背景にはそれなりの業績、実績が評価されてそのポストに就いたわけであるから、要職に就いて教授と言う職階の教員は現在では少ないと思われる。

管理運営職 (Administration) を専門として生きると決意したならば、管理運営について、積極的に、また必死に学ぶ姿勢がないから多くの構成員が希望を無くし、大学をホープレスにすることになる。目指す要職の座を射止めたが、それだけに満足して何を成すべきかという「志」が無いと返って大学の発展に障害となる。

こうした背景の中で、いささかまずい管理運営の一例を示す。大学の創立何十周年記念事業を多くの大学が企画し、祝賀のイベントを考えている。筆者が招かれた大学も90周年を祝う記念事業の中で筆者が立ち上げた国際プログラムをホスト大学として企画、実施したいので、協力して欲しいと依頼を受けた。20数年以上継続して実施されている事業ではあるが、筆者は定年退職後も招かれた大学の一員として参加学生の指導も兼ねて参加の機会を得てきた。創始者と言うことで、訪問する大学も長年に亘るこの事業を通じての関係から顔見知りが多く、顔つなぎや種々のプログラム企画についての助言、並びに基調講演などを殆どの場合依頼されてきた。しかし若い学部長を筆頭とするエキュゼクティブの中には、筆者があたかもその大学の代表であるかの如きと関係者から見られ、筆者を毛嫌いし距離を置いたり、排除しようとする動きも無い事は無かった。そうした感情になるのは、「誰の為に、何の為に」と言う目的意識が「公的」ではなく「私的」を優先しているから出てくるもので、既述为たように「ではそう思うのなら積極的に、自らが努力して代表と思われるよう努力すれば良いではないか」というのが筆者の認識である。かといって年長で有ろうとなかろうと年下の学部長や学部長補佐を馬鹿にした行為や行動をした覚えはないし、必ず組織を十分に理解し、関係者に配慮して気を使って行動してきたと思っている。先の学部長の例で言うならば、年が10才以上若くても学部長の方から積極的に近づいて来て、予め起こりうる場面を想定し確認するかのように相談すると言う姿勢があれば、殆ど問題は無い。自らが学部長で有り、俺こそが国際交流の担当者だと言って、他の人間が良く見られるのを気にするレベルの考えや羨望、ねたみなどは即刻棄てるべきである。それができてこそその人の、また大学の評価も上がる。何が為に自分がそのポストにいるのかと言う基本的考えが間違っている。ジェネレーション・ギャップもあり誤解もあるが、チーム・ワークが如何に円滑に機能するかはこの考え方がどれだけ深くシェアされているかに掛かっている。少し話がずれたが基本的認識なので余白を割いた。

ホスト大学として事業開催をしたいと言うことで、学長の意志を確認し、昨年行われたホスト大学を中心に関係ホスト大学で集まるキー・パーソンズ・ミーティングに参加を要請されオンライン会議に出席した。古い時代からの関係で既知の人も参加しており、気安く懐かしさを込めて話をすることが出来た。この参加を持って筆者が公式なこの事業に関する責任者、或いは代表者とは認識して居ないし、たまたま助言、口添えで大学、学長の意志を伝え熟慮を願うと言う場であったと理解している。その後も大学がホスト大学として事業の開催をするのであればホスト大学としての登録が必要となる。これに関してはむしろ既存のホスト大学側から示唆されたぐらいである。となるとこれまでどの程度この事業に大学が関わってきたか、具体的には過去何年ほどの間に何人ほどの学生を参加させてきたかと言う実績を参考資料として提出しなければならない。期限を切って資料提出を要請されたが、大学側の対応は極めて遅く、また逐次報告や連絡が無いので何処まで進んでいるのか確認のしようがない。さらに言うならばホスト大学になりたいというのであるならば、それなりのコミッテイ（委員会）を構成し、責任代表者を任命し、絶えず連絡を取り合う体制を敷く

のが普通で有る。しかし誰々に聞けとか、あの人に言えば良いとか言っているようでは話にならない。誰がその事業の担当、或いは係なのかがはっきり為らないから誰も責任を感じないので動かない。いつまで経っても目新しい動きがないので上層部はつい不安になってくる。「どうなっているんだ」と言われて聞いて見ると、以前に依頼した資料が出ていませんがどうなっているのですか？という問い合わせに驚き、慌てて資料を整えて送付すると共にお詫びも為なければ成らない。翌年ホストで事業を開催したいと申し出ている側がこの調子では「本当にやるきがあるのか、やってくれるのであろうか？」との疑問と不信感さえ作るまづい対応になることに誰も注意を払わない。こうした事が起きないように委員会を作り、情報を共有し、責任者を決めろと言っているのだが一向にその方向に動きはない。確かに別の大学からも今年のイベント開催の詳細が未だ何処にも見当たらないので聞いて欲しいとの依頼を受けて、知人に尋ねると「開催は必ずするので来週くらいには参加大学には早急に連絡する」との回答を得て安心していると、これまた何時まで経っても連絡は無い。不安になってしびれを切らした上層部の一人が「未だ連絡がないが、どうなっているのか？」と言う。いろいろ調べると他大学のウェブに、すでにその情報がアップロードされている。慌ててその年のホスト大学に連絡をとると翌日学長宛に連絡が来た。どうしてうちの大学には連絡が来ていなかったのかについて、ホスト大学側は内部の人事異動などでこれまでの事業について知る人間が居なくなり遅れた。他大学には既に送付したと言う事であった。顧みるにホスト大学側も誰宛に情報を送れば良いかが分からなかったのではとも解釈できるが、人事異動でこのような失態が起きるのは理由にならない。参加者の選考、論文作成、など、メインイベント開催までの3ヶ月は準備する側に取っては必ずしも十分な余裕とはならない。どこにこのような情報伝達のミスが起きる原因があるかと言えば、イベント開催が確認できておれば、いずれ遅かれ早かれアナウンスを送付せねば成らないのであるから早すぎるという事はない。参加希望する大学は然るべき書類の送付や準備を決められた期限までに揃え、提出することを守れば済むことである。委員会とその責任者が決まっていなくてホスト側は「誰宛てに情報を伝達すべきか」わからず、また参加大学側は「だれに聞けば良いのか」が不明で、事業参加の以前から参加意欲を低下させる嫌な雰囲気を楽しむことになる。合意した事項を守り事業を成功裏に終わらせる事が出来なければ意味はない。文化や伝統の異なる国々からの参加者がまとまった事業に参加為る目標、目的に向かって協調、協力することは国際交流の基本で有り、エチケット、マナーでもある。年齢や性別、身分を超えて合意したことを厳守しつつ事業を完遂することに国際交流事業を企画、実施する意味がある。素早い対応、正確な情報発信、期限厳守、ルール厳守ができてこそ相互友好、相互理解が進み相互信頼のレベルが高まる。研究論文の発表などアカデミックなことに限らず、事業を通じて新しいことを「学ぶ姿勢」がないと事業の継続は衰退、凋落、崩壊に至る。多くの人を知る、大学を知る、論文或いは研究発表者を通じて人を知る、異文化、伝統、エチケット、マナーを知る。ここで言う「知る」とは学ぶ事であり、まずは知る、それから興味、モチベーションを高めて勉強する。そして理解できた結果が「知恵」になる。知識と知恵の

「積」がパワーになる。**Knowledge x Wisdom = Power (KW)** である。